

グローバル化にどう対処すべきなのか

学長 下谷 政弘

今日ここに卒業の日を迎えられた皆さん、ご卒業おめでとうございます。たくましく成長されキャンパスを巣立っていく皆さんの姿を見るのは、本学にとってもっとも誇らしく、またうれしく思う瞬間です。教職員一同、心から皆さんの新たな門出をお祝い申し上げます。

今年の冬も雪が多く寒さの厳しい冬でした。しかし、季節というのは正直なもので、この福井の地にもようやく暖かい春がめぐってきました。この佳き日に際しまして、西川一誠福井県知事、田中敏幸福井県議会議員、沢田敏男福井県立大学特別顧問、松本文雄永平寺町長をはじめ、本学にゆかりの深いご来賓の方々をお迎えして、ここに平成 23 年度の学位授与式を挙行できますことは、本学にとってこの上ない大きな喜びであります。ご家族やご親族の皆様方におかれまして、卒業生諸君の達成感に満ちあふれた晴れがましい姿をご覧になって、さぞかし深い感慨の念に包まれておられることと存じます。お慶び申し上げます。

本日晴れて卒業するのは、経済学部 200 名、生物資源学部 84 名、看護福祉学部 75 名の計 359 名の諸君です。また、大学院を修了するのは計 39 名、うち博士号取得者は 3 名です。以上の諸君の中には、学部で 1 名の、また大学院で 4 名の留学生の諸君が含まれています。さらには、副専攻の修了者、そしてオナーズプログラム修了者の諸君にも、日頃の研鑽の努力を讃えたいと思います。

卒業生の皆さん、これから未来に向け飛び立とうとしている皆さんを前にして、私は大きな感動と喜びの気持ちを隠すことができません。皆さんもまた、新しい旅立ちに心躍らせていることでしょう。しかし半面では、キャンパスを巣立つ皆さんの中には将来への不安を抱えている諸君もあることでしょう。実に、世の中の変化のスピードはますます早く、そして激しさを増し、将来を正しく予測することが困難なものになっています。

とりわけ、近年、日本社会に大きな変化をもたらしているのは、いわゆる「グローバル化」の動きです。それは、戦後の「成長の時代」を通り過ぎてしまった今日の日本社会にとって、たとえば TPP の問題にせよ、あるいは大学の秋入学をめぐる問題にせよ、否応なく決断を迫るものとなっています。かつて私どもが学生だった時代には、思想的に「右なのか左なのか」が問題でした。それが現在では、この「グローバル化」という複雑かつ困難な課題を突きつけられ、それに対して一体どのようなスタンスをとるのが迫られているわけです。グローバル化とよく似た言葉で、以前は「国際化」という言葉が用いられていました。「国際化」は自ら進んで門戸を開き、世界の国々と主体的に連携するという意味合いにおいて、より積極的な内容でした。ですから必ずしも議論になるようなことではありませんでした。しかし、今日の「グローバル化」といわれる動きは、強制的に、いわば無理やりに受け入れを迫る大きな力となって私たちの前にたち現れています。「グローバル化」は今日、あたかも必然的な方向性のように動いているため、それに

正面切って抵抗するのは困難なようにも思われます。

かつて日本が成長を続けていた時代、たとえば 1980 年代には、世界の人口は 45 億、日本は 1 億 2 千万でした。当時、日本は経済大国であり、世界に占める人口の比重も相対的に高く、国内マーケットは十分に広いものでした。それが、将来予測によれば、2050 年には世界の人口は倍増して 90 億を超えてしまう反面、逆に日本の人口は現在の 1 億 2 千万から 9500 万人へと、すなわち今後 40 年間で毎年平均 70 万人ずつも減る計算になります。国内のマーケットは縮小していく一方であり、今後は、グローバルな視点から、国境を越えて積極的に世界のマーケットや成長力を取り込む必要があります。なかでも、成長著しいアジアに目を向けなければならない時代となっているわけです。もちろん、日本企業の多くはすでにグローバルに事業を展開しており、海外の現地法人の数は 1 万 9 千社にも上ります。そして、そのうち 7 割近くがアジア地域を進出拠点としており、近年ますますそのプレゼンスを高めているのです。卒業生の皆さん、時代は大きく変わりました。世界が、そしてアジアが相手です。視線を世界に、そしてアジアに向けねばなりません。皆さんはこれから、否応なくそうした時代に生きていかねばならないのです。

しかしまた、「グローバル化」の動きとは、往々にして世界の国々の、また地域ごとの特殊性や多様性を踏み潰して、画一的な基準の枠内に取り込もうとする巨大な力であることもいうまでもありません。さきに述べた「国際化」という言葉がそれぞれ固有の文化や伝統の相互理解と尊重につながるものであったのに対して、まさに正反対の力学でもって語られるのは、「グローバル化」のそうした性格を危惧することからなのです。卒業生の皆さん、大事なのは今日の「グローバル化」のそうした二面的な性質をよく理解することです。現実社会の変化を正しく認識して、それに立ち向かうのに十分な準備と心構えをもつことなのです。

昨年の卒業式は 3 月 11 日の東日本大震災のあとでした。私はその時、「何が本当に大切なのか」と題して話しました。次々と報道される被害の甚大さと被災者の惨状とを知って、また人々が互いに助け合う絆の強さを見て、若者達の価値観も大きく変化しました。その中で、一体全体、皆さんにとって、これからの人生で「何が本当に大切なのか」、これから何を大事にしなければならないのか、と問いかけたわけです。皆さんが青春時代をすごした福井県は自然環境にも恵まれ、住みやすさという点では「幸福度日本一」といわれています。卒業して福井を離れる諸君も、そして福井にとどまって頑張ろうとする諸君も、ぜひとも、人生において「何が本当に大切なのか」をよく考え、青春時代をともに過ごした福井のことを忘れずに活躍されるように祈ります。

今年、本学は創立 20 周年を迎えます。6 月には記念式典を予定しています。また、10 月にはホームカミングデーということで、全体的な合同の同窓会も企画しています。今年の卒業式で、本学の卒業生は総計 6346 名となりました。ぜひとも、皆さんには卒業後も先輩諸君と連れだって、折にふれてキャンパスを訪ねてください。本学はようやく成人式を迎える若い大学ですが、次の 10 年を見据えて、さらに改革を重ね発展を目指します。

今日ここに、皆さんは卒業して本学を巣立つわけですが、この大学で学んだことに大いなる誇りをもってご活躍ください。靴音も高く学び舎をあとにしてください。

皆さんのいっそうのご健闘を心から期待して、以上、本日の式辞といたします。